

Title	ヒルファアーディングの経済学方法論(I) : オーストロ・マルクス主義とヒルファアーディング
Sub Title	Hilferding's Methode der Politischen Okonomie (I)
Author	赤川, 元章(Akagawa, Motoaki)
Publisher	
Publication year	1978
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.21, No.2 (1978. 6) ,p.44- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19780630-04051599

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヒルファーディングの経済学方法論 (I)

—オーストロ・マルクス主義とヒルファーディング—

赤 川 元 章

- I マルクス主義の危機
- II M・アドラーとの関係
 - (1) カント主義とマルクス経済学
 - (2) ベーム・バヴェルク批判
 - (3) 因果性と目的論
(以上本号)
- III E・マッハとの関係
 - (1) オーストロ・マルクス主義のE・マッハ観
 - (2) 要素一元論と函数概念
- IV 貨幣論
 - (1) 名目主義と機能価値論の内在的關係
 - (2) 流通手段本質論における価値尺度機能
- V 問題の展開
 - (1) 弁証法と経済学方法論
 - (2) 新しい概念
- VI まとめ

I マルクス主義の危機

1883年にマルクス (K. Marx) が死んでから、暫くの間、マルクス主義の理論的・精神的指導者はエンゲルス (F. Engels) であった。彼は資本主義の急速な発展とマルクス主義に基づく大衆運動の定着化を経験し、これまでマルクスと二人で構想してきた方向に、ある程度再考の必要性を自覚するに至った。エンゲルスは、1848年革命の敗北に対して、市街戦中心の蜂起を否定しないまでも、戦術的には旧式なものであったと総括した。そのうえで、彼はローマ帝国の弾圧のもとでキリスト教が勝利を獲得したように、なによりもまず、マルクス主義の大衆への滲透に希望を託しつつ、その方法として、選挙という合法的手段による議会活動の意義を強調したのである。^(注1)

こうしたエンゲルスの想定をすどく把握し、当時のドイツ社会民主党にセンセーショナルな問題を提起したのがベルンシュタイン (E. Bernstein) であった。彼は新しい客観状勢を「すべての先

(注1) エンゲルス、「フランスにおける階級闘争 (1895年版) への序文」『マルクス・エンゲルス全集』第7巻 518頁～536頁。

進国で資本主義的ブルジョアジーの特権が民主的諸制度に一步一步と道をゆづりつつある」と展望し、そのため党は、労働者を組織し、民主主義に向けて労働者階級の「知的・道徳的成熟」を促進し、これによって「国家内でのあらゆる改良のために闘う」べきであると主張した。またベルンシュタインは、従来、党を支配していた革命の方法を「実現しないもの」と批判し、さらに、マルクス・エンゲルスの根本思想までも修正しようと試みたのである。ベルンシュタインは、物質を第一義的な決定要因とする唯物論に疑問を投げ、かつ、複雑な対象を弁証法で説明することの危険性を指摘した。また、彼は、限界効用論と労働価値論とを方法論的に同一視し、ついには、認識論において新カント派、ランゲ (F. A. Lange) の批判主義を撰取すると表明するほどになるのである。^(注2)

他方、「カントへかえれ」(Zurück auf Kant) という新カント派の叫びが、1860年代以降のドイツ哲学界に登場した。彼らは封建的ユンカーの反動の中で、超越的な批判主義に基づきつつも、科学と技術の自由なる開花に関心を示し、自然に関する唯物論的解釈に接近したのである。^(注3)

当然、このような傾向のもとでは、マルクス主義の修正化運動の気運が高まり、ヴォルトマン (L. Wortmann)、シュミット (C. Schmitt)、フォアレンダー (K. Vorländer) らの如く、マルクス主義的唯物論でさえ、18世紀の機械的唯物論と同じ類のものだとみなし、マルクス主義にカント的な主観的要素を加味して再構成しようとするものがあらわれた。^(注4)

さらに、帝政ドイツにおける帝国主義的経済基盤の確立は、新カント派自体の自由主義思想の自立性について危惧を抱かしめ、この派の中にも社会主義に共感するものが続出する。かくて、資本主義の発展に対応する改良主義闘争の提唱とマルクス主義のカント化への試みは、軌を一にした思想運動の潮流を形成したのである。^(注5)

この運動は、ドイツ社会民主党内部のインテリ部分にのみ衝撃を与えたとはいえず、明らかに、次のような事情を反映していた。つまり、社会主義運動が労働者階級以外の諸階級の一部をも吸収す

(注2) ベルンシュタイン『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』、佐瀬昌盛訳、5頁～10頁、35頁～43頁、55頁～56頁、260頁～272頁。

(注3) G. Jacobson „Der Widerhall der Kantgedankenfeier in der Sowjet Presse“, Unter dem Banner des Marxismus, Jahrg 1. Heft 1. S. 186.

フォアレンダー『カントとマルクス』上巻、井原紀訳、253頁～257頁。

(注4) 波多野 鼎「新カント派社会主義」『社会経済体系』第8巻、27頁～33頁。もちろん、これらの論者の見解には幾分相違がある。たとえば、ヴォルトマンは社会主義の倫理的基礎づけを重視したが(波多野鼎、『前掲書』40頁～42頁)、シュミットは、これを認めようとせず、むしろ歴史哲学の分野にカントと社会主義の関係を求めようとしていた(フォアレンダー、『前掲書』68頁、82頁)。

(注5) G. リヒトハイム『マルクス主義』、奥山次良他共訳、244頁。

なお、新カント派の哲学者のかかる見解については、横浜社会問題研究所編『新カント派の社会主義観』を参照。

このようなアカデミックな新カント派の見解がマルクス主義者に余り注目されなかった理由については、フォアレンダー『前掲書』321頁～322頁を参照。

(注6) ローゼンベルク『ヴァイマル共和国成立史』、足利利男訳、50頁～51頁。

「カント主義は、現代のドイツ青年、特に大学生たちの間に深く根をはっている。彼らが今日、マルクス主義に代表される社会主義にやってくる場合、カントとマルクスの総合は、彼らの強い精神的要求に対応している」(K. Kautsky, Die Materialistische Geschichtsauffassung, Bd. I, 1927, S.65)。

るほど拡大し、労働者階級も生活条件の向上とともに改良主義的傾向に陥り、また、その指導層は、組織の温存、選挙および行政に関するブルジョアジーとの妥協、などを通じて保守化してきたのである。^(注7) そのうえ、ブルジョアジーのイデオログは、マルクス主義に対して公然と批判を加えていた。^(注8)

1890年代の中頃に始まるこの「マルクス主義の危機」に抗して、旧来のマルクス主義路線を継承し、かかる観点から論駁を開始したのがカウツキー (K. Kautsky) に代表される、いわゆる「正統派マルクス主義者」とローザ・ルクセンブルグ (R. Luxemburg) を中心とする左翼急進派であった。ここに修正主義に対する論争が展開された。この論争を踏まえて、マルクス主義の再生を試みようとする新たな一潮流が登場した。これがオーストロ・マルクス主義である。

バウアー (O. Bauer) は、当時のオーストリアの状況を次のように説明している。「学界の思潮傾向と対決して、若き世代が成長してきた。この若きマルクス主義学派は、旧世代のマルクス主義者、たとえば、カウツキー、メーリング (Mehring)、ラファエルグ (Lafargue)、プレハノフ (Plechajev) よりもいっそう時代精神の動向に接近していた。アメリカのマルクス主義者、ボードン (Bodin) は、このようなウィーン(注9)の若きマルクス主義学派をはじめ『オーストロ・マルクス主義者』(Austromarxisten)とよんだのである」

同派の理論的指導者M・アドラー (Max Adler) は、ドイツ社会民主党におけるベルンシュタインらの問題提起を新カント派などの外部の敵に呼応する危険なマルクス主義批判とみなした。とはいえ、彼はこの問題提起がなお「その解決を待っている」と捉え、その意味では、マルクス主義陣営内部に反省を喚起し、そのため、マルクス主義の「回春の泉」(Jungbrunnen)となる「偉大な功績」だったと評価する。だが、M. アドラーによれば、ベルンシュタインの批判は、結局、「非組織的な、多くの点では、まったく経験論的な細部批判」であったから、それらによってマルクスの理論は、以前ベルンシュタイン自身が語ったように、「事物の事実上の発展と個々の点において正確に一致していなくても」、毫も崩壊するものではないとした。

その限りでは、M. アドラーの立場は、マルクス主義の「正当化を試みる」理論的努力を意図するものであった。^(注10)

だから、マルクス主義の正当性を志向している点のみに着目すれば、オーストロ・マルクス主義

(注7) 『ドイツ現代政治史』、飯田収治他著、132頁～156頁。ゴーロ・マン『近代ドイツ史』(2)、上原和夫訳、36頁～37頁。

(注8) たとえば、シュタムラー (R. Stammler) の *Wirtschaft und Recht nach der materialistischen Geschichtsauffassung*, 1896, ベーム・パウエルク (E. v. Böhm-Bawerk) の *Zum Abschluß des Marx'schen Systems*, 1896.

(注9) Otto Bauer, *Eine Auswahl aus seinem Lebenswerk*, S. 228.

(注10) M. Adler „Kausalität und Teleologie im Streit um die Wissenschaft“ (以下 KT と略す) *Marx-Studien*, Bd. I, 1904, SS. 196～208. 『マルキシズム方法論』、福田次郎訳、11頁～28頁。

(注11)
もまたカウツキー派に含みうるかもしれない。しかし、M. アドラーの理論は、修正主義や新カント派の問題提起を正統派よりもいっそう深刻に受けとめていた。

彼は、客観的・実証主義的傾向の強い正統派とは異なり、カントならびに新カント派との調停に立つマルクス主義解釈によって、マルクス主義の正当化の方向を打開しようと試みたのであった。(注12)
こうして、M. アドラーは、ドイツ主観的観念論の諸成果を摂取し、時代に照応するマルクス主義を再構成したのであるが、その傾向が、彼の問題意識および方法論に制約されて、実際には、修正主義や新カント派に近くなることは、必然だった。それゆえ、彼を含むオーストロ・マルクス主義が、マルクス主義のカント化を試みる修正主義者たちから理論的な好意を寄せられたとしても理由のないことではない。(注13)

本稿で取りあげるヒルファーディング(R. Hilferding)もまた経済学を主要な研究領域とし、M. アドラー以上にマツハ(E. Mach)の「思惟経済説」(Theorie der Denkökonomie)に関心を示しているとはいえ、基本的方法論においては、カント主義とマルクス主義とを調停したM. アドラーと強く連繫している。

ところが、従来のヒルファーディング研究は、彼のこのような方法論の性格にまで深く立ち入らずに、むしろ彼の理論的成果を研究者固有の観点から、総じて特定の領域について批判的に再検討する(注14)という仕方で行なわれてきた。とりわけ、その中でも帝国主義的段階に顕著にあらわれた経済的諸現象、つまり株式会社、独占、金融資本、恐慌の形態変化、関税政策などが資本の集積・集中の意義との関連で追求され、その意味では、彼の主著『金融資本論』第2篇以後の吟味に力点がおかれていた。(注15)
確かに、このような分野こそ、『資本論』以後の帝国主義段階における経済的变化の問題であり、同時にまた修正主義とも激しく論争を展開した領域でもあった。(注16)したがって、それらは理論的に解明し、実践的に克服すべき最も焦眉な課題であったから、『金融資本論』第2篇以降

(注11) A. Thalheimer „Die Auflösung des Austromarxismus“, Unter dem Banner des Marxismus, Jahrg I, Heft Nr. 3. S. 475.

(注12) M. Adler „K, T“, a. a. O. SS. 206~207, 『邦訳』26頁。

「一般にいわれる『オーストロ・マルクス主義派』の志向は……正統派と改良主義との間を調停することであった」(P. Heintel, System und Ideologie—Der Austromarxismus im Spiegel der Philosophie Max Adlers—, 1967, S. 9.

(注13) M. V. Tugan-Baranowski „Kant und Marx“, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 33, 1911, S. 183.

(注14) ヒルファーディングの提起した諸問題を総体的にとりあつかったものもある。しかし、それらは研究者自身の学説を展開する過程で、たとえば、問題毎にヒルファーディングの見解と他の論者の見解とを対置させてならべるにすぎないもの〔キューネ(K. Kühne), Ökonomie und Marxismus, 1(1972), 2(1974)],あるいは、必要に応じて批判的に闡説するもの〔グロスマン(H. Grossmann), Das Akkumulations- und Zusammenbruchsgesetz des kapitalistischen Systems, 1928]などがある。

(注15) 星野中, 「ヒルファーディング『金融資本論』の基本的構造とその問題点——研究史上の位置との関連において——」, 内田他編『資本主義の思想構造』, 265頁。

(注16) 倉田稔『金融資本論の成立』, 68頁~69頁。

はヒルファーディングの理論的業績の中でも特に注目すべきものであった。^(注17)ブルジョア経済学者ゾーマリイ(F. Somary)にさえ、この「ヒルファーディングの労作は、資本理論の領域において最良の研究の一つであるように見える。マルクス主義の土台に立たない者といえども、ヒルファーディングの叙述から豊かな刺激を得るだろう」といわせたのである。^(注18)

しかし、ヒルファーディング理論は、レーニンが「マルクス主義を日和見主義と和解させようとする一定の傾向」と評価した如く、^(注19)「修正主義」としての性格をもっていたことは周知のことである。事実『金融資本論』において萌芽的に存在した傾向、つまり「組織された資本主義論」は、1915年『Der Kampf』誌上ではじめて理論的に提唱され、実践的にも、独立社会民主党と合併した社会民主党の中で多数を制し、1927年のキール党大会では、ヒルファーディング自身が、この見解を報告するほどになる。^(注20)

この傾向は、当然、ヴァルガ(E. S. Varga)らの激しい批判を浴びることになったが、^(注21)それと同時に、ヒルファーディングのすべての理論的業績についても、根本的に再検討されたのは不可避であった。このことは、『金融資本論』第2篇以降にとどまらず、すでにカウツキーなどによっても^(注22)批判されていた「貨幣論」の領域にも及ぶことになる。

確かに、ヒルファーディングの意図に従えば、『金融資本論』の体系的構成は、「貨幣論」を基礎^(注23)にして展開されている。そして、この領域の中に、「著者の誤り」や「アカディミックスな気まぐれ」^(注24)が明白にあらわれているとすれば、もともと彼の経済学方法論それ自体に問題がふくまれているはずである。本稿の目的は、この点を追求することにある。

II M. アドラーとの関係

(1) カント主義とマルクス経済学

ヒルファーディングもまた経済学の対象および性格を明らかにするためには、やはり商品を前提とする。商品は使用価値と価値とによって構成されているが、彼によれば、商品は、使用価値つま

(注17) リヒトハイム、『前掲書』、260頁～261頁。

(注18) F. Somary, „Besprechungen: Das Finanzkapital“, Schmollers Jahrbuch, XXXV, Jahrg IV. 1911, S. 491.

(注19) レーニン、「資本主義の最高の段階としての帝国主義」『レーニン全集』第22巻、224頁。

(注20) W. ゴットシャルヒ、『ヒルファディング』、保住敏彦他訳186頁、202頁、205頁～215頁。

(注21) ヴァルガ『世界経済年報』(7) (経済批判会訳)の「第2部、独占形成の諸問題と『組織化された資本主義』の学説」を参照。

(注22) たとえば、ゲー・カズロフ編輯『貨幣と信用』(米村正一訳)の第8章・第14章参照。

(注23) R. Hilferding, Das Finanzkapital (以下 F. K と略す), Dietz 1955, SS. 2～3『金融資本論』上巻、岡崎次郎訳、10頁～11頁。

(注24) レーニン、『前掲書』224頁。

(注25) K. Kautsky, „Finanzkapital und Kreisen“, Die Neue Zeit, 29Jahrg Bd. 1, Nr. 37, 1911, S. 772.

り「自然物としては、自然科学の対象であり」、価値つまり「社会的なものとしては、社会科学の、すなわち経済学の対象である」。ヒルファーディングは、まず、「一方の区分肢 (Glied) を定立することが他方の区分肢を排除するところの二分法 (Dichstomie) ある」とする「考察方法」によって、商品の使用価値＝「自然的側面」を「経済学の考察範囲外」におい出すのである。そのうえで、彼は、この「経済学の基本概念は、唯物史観の基本概念とおなじもの」と設定し、この「基本概念」を「一定の組織形態における人間社会の生産力」と規定する。また、彼は「経済学は歴史科学として」「構成される」とするから、その結果、「経済的合法則性は歴史的合法則性とおなじものにならざるをえ」ないと主張する。ところが、ヒルファーディングによれば、この「合法則性」の究明は、「歴史的な生活の一部」としての「経済生活」が「因果的に支配されるところの要因」を把握することにある。^(注1)

しかし、ヒルファーディングにとっては、マルクスと彼の先行者たちとを区別するものは、「論理的叙述」でもなく、また「彼 (マルクスをさす——筆者) の体系の根本に横たわる」唯物史観において「経済的範疇は同時に歴史的であるという認識」を含んでいるからだけでもない。この区別を特徴づける根拠として、彼はむしろ次の点を強調するのである。(i) マルクスは、「経済的諸関係という物象的仮象の背後にひそむ」「社会化された人間と社会的諸関係の本性」を暴露したこと。(ii) マルクスはこのことに基づいて「社会生活の対立性」を明らかにしたこと。かくして(iii)マルクスは、この対立性と結びつけて「経済的範疇が生成し、変化し、没落する」ことを示すとともに、「これら^(注2)のすべては法則にしたがって現象するという、発展的機構」として捉えたこと、がこれであった。

明らかに、ヒルファーディングのかかる経済学規定の方法は、M・アドラーが新カント派のドイツ西南学派から批判的に摂取した科学体系の分類方法に接近している。^(注3)

では、一体、M. アドラーは、どのような根拠から、このような方法を提起したのだろうか。いま、M. アドラーの見解にしたがえば、マルクスの方法は「精神諸科学」固有の対象領域である「歴史的・社会的な生活」を近代自然科学の諸成果によって基礎づけんとするものであった。

この想定の本根には、広義の「自然」を「社会的存在」と「自然的存在」とに区分し、そのうえで、前者すなわち「歴史的・社会的な生活」が、後者すなわち狭義の「自然」と同一の「論理的性

(注1) R. Hilferding „Böhm-Bawerks Marx-Kritik“ Marx-Studien Bb. I, 1904, SS. 8~9, 11, 60, 「ベーム・バヴェルグ批判」『マルクス経済学研究』玉野井芳郎・石垣博美訳 142頁, 143頁, 217頁。

(注2) R. Hilferding „Aus der Vorgesichte der Marxschen Ökonomie(以下A. V. M. Öと略す)“ Die Neue Zeit, 29 Jahrg, Bd. II, Nr. 44, 1911, S. 626, 「マルクス経済学前史より」前掲『マルクス経済学研究』に所収, 31頁。

(注3) M. アドラーの問題提起をみると、「個々の点において新カント主義と和解していることは、非常に興味をそそられる」(P. Heintel, a. a. O. S. 69)といわれる通り、確かに彼は、「自然と精神とが科学の分類にとって標準的な対立なのだ」というリッケルト (H. Rickert), ヴィンデルバンド (W. Windelband) およびミュンスターベルク (H. Münsterberg) らのドイツ西南学派の問題提起に基づき論旨を展開している (M. Adler, „K. T.“ XX Die Abgrenzung der sogenannten Geisteswissenschaften, a. a. O. SS. 421~430, 『邦訳』352頁~364頁)。

質」をもち、それは因果法則によって支配されるという認識がある。^(注4)

このようなM. アドラーの方法は、なによりもまず、マルクスの「唯物論」を「自然科学的唯物論と混同ないし同一視される」傾向と峻別し、^(注5)「唯物史観において完成されたマルクスの思想の特性」を「唯物論的な誤解から解放すること」を目的としていた。

というのは、「唯物論という言葉には、マルクスがこれを使用した関係からいえば、経験的という意味しかない」し、また「マルクスによって新たに根拠づけられた社会科学的思惟方法の全的意義は、まさに唯物史観において開示されているからである」^(注6)と。したがって、M. アドラーのいうマルクス主義とは、社会と歴史を対象とする「精神諸科学」の領域に包括される唯物史観であって、その認識論的基礎づけは普遍的な法則科学を充用したものにはかならない。

その意味では、新カント派と異なり、「アドラーは、自然科学と社会科学との間のどのような二元論(Dualismus)も拒否し」、「社会科学の内容は、自然科学の内容とまったく同じように規定され」、^(注7)「その特徴を経験の体系化においている」ともいえよう。

M. アドラーは、以上のような観点に基づき、次に発展した唯物史観が「剰余価値論を媒介にして」「資本制的経済秩序の経済学的批判」と「精神的統一を形成する」と規定する。したがって、彼は、唯物史観の根本概念たる「社会化された人間(der vergesellschaftete Mensch)」は、「資本制的生産過程分析」の「基礎的な概念」たる「生産関係」から把握されるとするのである。^(注8)

ところが他方、M. アドラーは、この「社会化された人間」の概念がカントの「意識一般(Bewußtsein überhaupt)の超越的概念」と類似する思考方法をもって構成されたものとも指摘し、マルクス業績もまたカントと同様に「認識批判」という「理論的」部面に位置づけたのである。そのため、マルクスの「社会的諸関係」という観念は「資本制的生産方法の内部における経済的諸関係の物象的仮象(der sachliche Schein)の揚棄」をカントと「同種の思惟過程において遂行する」ものであると論ずる。^(注9)

それゆえ、M. アドラーにおいては、「社会化された人間」の概念は、いわば二面的に規定されている。だが、彼は、前者の「発展した唯物史観」との関連の場合は問題提起のみにとどめ、もっぱら後の場合をカントとの関連で探求していくのである。ここでは、M. アドラーによれば、カン

(注4) M. Adler, „K. T.“ a. a. O. S. 382~383『邦訳』295頁~296頁。

M. Adler, Marx als Denker, SS. 21~26, 1925 (初版1908)「思想家としてのマルクス」山田秀男訳, 30頁。

(注5) M. アドラーは、この点では、エンゲルスさえもマルクスと異なり、「その哲学的立場は自然科学的唯物論のそれにはるかに接近している」という(M. Adler, „K. T.“ a. a. O. SS. 297~298,『邦訳』162頁~164頁)。

(注6) M. Adler „Marx als Denker“ SS. 52~53『邦訳』85頁~87頁。

(注7) F. Eulenburg „Literatur: Marx-Studien“ Zeitschrift für die gesammte Staatswissenschaft, 1906 S. 567.

(注8) M. Adler, „K. T.“, a. a. O. S. 293,『邦訳』157頁。

(注9) M. Adler, „K. T.“, a. a. O. S. 370,『邦訳』276頁。

トは原子論的諸個人の意識にあらわれる「人格的仮象 (der persönliche Schein)」, つまり「自我形態」を「一切の個人を相互に関係せしめる意識一般」の, いいかえれば, 「人間の超越的意識」の「非人格的な对象的結合」に還元することによって「超越的・批判的立場」を確立したとする。これに対し, マルクスは「経済的諸関係の对象的仮象」, つまり商品形態を分析するために「価値」すなわち「経済的価値」を設定し, さらにこの「価値」を「社会化された人間」の「人格的結合」に還元することによって「論理的・批判的立場」を確立したとするのである。この場合, カントの「意識一般」の概念がマルクスの「経済的価値」の概念に対応している。

また, M. アドラーは, このようなカントの立場における個人的意識と意識一般の内的関係を次のように解釈する。「人間は, かれらの相異なる種類の思惟行為, すなわち判断を精神的交換 (der geistige Austausch) において妥当の要求 (Geltungsansprüche) として, 共通の尺度 (ein gemeinsames Mass) に関係させることにより, 人間はかれらの相異なる個人的な諸意識労働を人間の意識として, すなわち意識一般として相互に等置する^(注10)」と。

それゆえ, かかる「交換」概念は, 「特殊な個々の意識が同時に意識一般の現象である」という「人間の思惟の特性」において, いわば, この思惟が必然的に「普遍妥当性」(Allgemeingültigkeit)^(注11)をかくとくするための不可欠な契機となる場合にあらわれるという。

他方, M. アドラーは, マルクスの「経済的価値」の概念についても次のように規定する。この「価値」概念は, 「交換価値の概念的基礎」であり, 「個々の特殊な価値形態を, すなわち個々の特殊な交換関係を概念的にはじめて可能にするところの本源的な尺度関係 (ein prinzipale Massbeziehung) を表示している」と。かくして, 彼はこのようにカントとマルクスの「思惟過程」を論証した後, 「経済的交通と商品交換を明白にするために, マルクスの概念が論理的に果たすものも, 精神的交通と思想交換を可能にするために, カントの概念が超越的に果たすものも, 共に同一の機能に属する^(注12)」と結論づける。

しかし, このようにマルクスをカントに対応して把握する方法は, 両者とも共通の前提から出発していなければならぬ。M. アドラーは, マルクスの「経済学批判序説」の一節, 「人間は言葉の厳密な意味で政治的動物である, たんに社交的動物 (geselliges Tier) であるのみならず, 社会の中でのみ個別化せられうる動物である^(注13)」(傍点—筆者)に求め, 次のように規定する。人間の「社会的性格はすでに各個人の状態において与えられており」, そのため「社会の本来の問題は, 決して多数の結合から出発するのではなく, まったくただ個人的意識においてのみ実存する」。あるい

(注10) M. Adler, „K. T“, a. a. O. SS. 374~376, 『邦訳』282頁~285頁。

(注11) M. Adler, „K. T“, a. a. O. S. 380, 『邦訳』291頁。

(注12) M. Adler, „K. T“, a. a. O. SS. 377~378, 『邦訳』288頁~289頁。

(注13) K. Marx „Einleitung zur kritik der Politischen Ökonomie“, Marx. Engels Werke 13, S. 616.

は「個人的存在を初めて社会的存在となすところの人間特有の性格はことごとく個々の意識の中に根拠づけられている」と。^(注14)したがって、人間の社会的本質を把えるために、M. アドラーは、カントとマルクスを統合して、個人的存在における個人的意識を前提としたのである。同時にまた、人間は社会的存在であり、普遍妥当的な「意識一般」をもつから、彼はかかる設定を可能にするために「人間存在」(das Dasein des Menschen)の要件をカントやマルクスにおいて明らかにしなければならなかった。

M. アドラーは、この要件をカントにあっては「社交性」(Geselligkeit)という概念、すなわち「人間にとって自然的傾向」であり、「社会に対する適合性と社会を求めようとする性向」^(注15)に見出し、その概念の使用をマルクスの中でも「発見」し、なお、この概念を拡充していったのである。

こうして創出されたのが「個人の社会化 (die Vergesellschaftung des Individuum) というマルクスの根本思想」であり、この思想こそ「社会の本来の問題」を「特殊な新しい性格において明瞭ならしめるものである」と強調する。^(注16)それゆえ、M. アドラーのこのようなマルクス解釈は、必然的にたえずカントの概念を如何に包括するかという問題意識にとりつかれていた。たとえば、彼はいう。「この個人の社会化という観念は、それ自体においてすでに個人的意識と意識一般との超越関係をそのまま表示する映像(Spiegelbild)である」と。^(注17)

まさに、M. アドラーは「カントの批判主義とマルクス主義的社会科学との結合」という問題意識^(注18)をここに結実させたのであるが、その方法は、マルクスによってカントを、カントによってマルクスを解釈することで、いいかえれば、カントの「認識批判的概念」とマルクスの「社会批判的概念」とに「内面的・実質的關係」を与えることで、両者の「批判的立場」を鮮明にしたのであった。^(注19)

だが、M. アドラーの展開した「マルクスの思惟の特殊な業績」についてみれば、彼は「使用価値」をまったく捨象して「経済的価値」の意義だけを取りあげ、さらにこの「価値」概念を「社会化された人間」の諸関係に還元し、かつこれらの諸概念や諸関係を「交換関係」の媒介によって概念的に論理づけたのであった。その意味では、M. アドラーがドイツ西南学派の科学分類法とカントの超越的批判的方法を採用したことは、マルクス商品論の論理的構成の中にドイツ主観的観念論

(注14) M. Adler, „K. T“, a. a. O. SS. 373, 380, 『邦訳』282頁, 292頁。

もちろん、M. アドラーといえども「人間の共同生活を形成する社会的結合の統一は、個々の相互に關係する個人から成り立つたなる合計現象あるいはたかだか複合現象だ」とする見解、いいかえれば「人間的存在の結合」をたんに諸個人の総和として把える見方に対しては、「最悪の形而上学」と規定して否認する (M. Adler, „K. T“, a. a. O. S. 380, 『邦訳』291頁)。

(注15) カント『判断力批判』(上), 篠田英雄訳, 97頁~98頁, 237頁。

(注16) M. Adler „K. T“ a. a. O. S. 380, 『邦訳』292頁。

(注17) M. Adler, Marx als Denker, S. 160, 『邦訳』270頁。

(注18) M. Adler, Kant und der Marxismus, S. VII, 1925, 「カントとマルクス主義」『世界大思想全集』(42), 井原紘訳 7頁。

(注19) M. Adler, Marx als Denker, S. 166, 『邦訳』, 281頁。

の最高の成果をも包摂しうることを明らかにし、そのことによってマルクス主義が新カント派らの批判に耐えようとする理論であることを実証したのである。

このM. アドラーの方法は、主としてカントの「定言的命令 (Kategorischer Imperativ)」とマルクスの階級闘争論とを結びつけて「社会主義の倫理的根拠づけ」をめざした修正主義の傾向とは鋭く一線を画すものであった。

バウアーによれば、「彼は、新カント主義を採用したとはいえ、それは修正主義の如く、新カント主義とマルクス主義とを折衷的に結びつけるためではなかった。まさに、カント的な認識批判の手段をもって、すべての改良主義的な水増し化 (Verwässerung) に対し、マルクス主義的社会科学を弁護するためであった」。つまり、「M. アドラーは、自分の哲学上の主要な業績を『社会的先天性』 (Sozial a priori) の『発見』にあるとみなしていた^(注20)」のだ。

しかし、この方法は、逆にマルクス理論のM. アドラー的な特殊な再構成でもあったから、そのため、社会における個人的存在と個人的意識という特殊な側面が重視される傾向に陥ったのは否定すべくもない。

したがって、すでに説明したヒルファーディングの方法は、以上のようなM. アドラーの見解に照応しつつ、展開されていることは明白であり、その共通の特色は次の点においてもはっきりとあらわれている。つまりヒルファーディングもまたマルクス経済学の理論的な問題提起について、「交換関係」を媒介にして成立する「社会関係」を重視する。

このことは、個人的存在における個人的意識を出発点として形成される「社会的存在」を対象にするということである。ヒルファーディングはこう論ずる。

「社会的関連は無数の相互に独立せる個別的諸行為の……意識することなしに意欲せる結果として……あらわれる」。ここでは、「ひとびとは相互に分離して私的個人として相対立し、自分自身の意志にしたがい、自分自身の危険において行動する。ただ必要のみが、かれらをして相互関係に立ちいることを余儀なくせしめるのであるが、それは、かれらが物として交換されることによってなされるのである。なぜなら、かれらは物の所有者としてのみ、他の所有者に対して関心をもつからである」。この場合、物すなわち「対象物は一社会関係の象徴として、その媒介者として認識され」、したがって「これらの対象物の相互関係」もまた「交換行為のうちにふくまれている」。そ

(注20) Otto Bauer, a. a. O. SS. 230~231.

M. Adler は、ランゲの『唯物論史』第7版への「批判的補遺」を書いたコーヘン (H. Cohen) の一節を引用した後、次のように論じる。「ここで主張されたカントへの結合は、党の内外で新カント派の運動によって試みられた社会主義の政治的要求を、カントの実践哲学の教説へと還元することとは全然無関係である。まさに、この意味でベルンシュタインおよびその他の修正主義に従う社会主義者らは『カントへ帰れ』の標語に同意したのである。むしろ、カントの認識批判の理論的方向が問題なのであり、そしてその適用において社会理論のためにもまた科学の厳密な概念をつくり出すことが問題なのである」と (M. Adler, „K. T.“ a. a. O. SS. 284~285, 『邦訳』143頁~144頁)。

のため「交換行為をとおしてはじめて社会的関連が表現される……ということは明白である。……経済的見地からすれば、個々の人が関連しあうのは、交換取引においてよりほかにはまったくない。交換取引がいかに規制されるかを示すところの法則はそれゆえに同時に社会の運動法則である。しかるにこの運動法則を発見することこそマルクスが理論経済学の問題として提起したところの課題であった」。(注21)つまり「理論経済学の任務は、このように規定された交換の法則を見出ことである」。(注22)

確かに、マルクス経済学におけるヒルファーディングのこの展開をみれば、リヒトハイムがヒルファーディングの「苦心の末に改めてみつけ出した」理論的業績として、使用価値と交換価値の区別の意義および使用価値捨象の根拠をあげているのも無理からぬことである。だが、このリヒトハイムの見解は、M. アドラーを過少評価して十分に検討しなかった結果であると思われる。(注23)

(2) ベーム・バヴェルク批判

ヒルファーディングのベーム・バヴェルク批判は、二つのモチーフから成立している。それは、限界効用理論に対する批判とベームのマルクス批判に対する反批判とである。

これらの批判を展開するなかで、ヒルファーディングの方法論上の特質がはっきりとあらわれてくる。そこでは、ブルジョア経済学との対抗上、かえってより鮮明にマルクス経済学に関する彼の理解の仕方をむきだしたのであった。ヒルファーディングの批判方法の要点はこうである。

まず、ベーム・バヴェルクらの「心理学派」の経済学は、マルクス経済学と「出発点がまさに正反対」であり、その方法は「経験的」「心理的」な「証明方法」である。

したがって、その出発点は「欲望充足」=効用であり、その点からすれば、商品においては、「使用価値」こそが第一義的なものとなる。ところが「論理的」「弁証法的な演繹方法」に立つマルクスは、この「使用価値一般を捨象」して、商品のもう一つの契機である「価値」を経済学の対象とした。

この方法は、「労働が価値の原理」であり、根本的には、「社会関係」を考察するものである。それに対し、心理学派は、このような意味での「経済学を自己の考察からとりのぞくこと」によって構

(注21) R. Hilferding, „Zur Problemstellung der theoretischen Ökonomie bei Karl Mark“, Die Neue Zeit, 23 Jahrg Bd. I. Nr. 4, SS. 104~107「カール・マルクスにおける理論経済学の問題提起について」『マルクス経済学研究』に所収, 115頁, 118頁~120頁。

(注22) R. Hilferding, F. K. S. 11『邦訳』17頁。

(注23) リヒトハイム, 『前掲書』, 150頁。

リヒトハイムはいう。「アドラーは、その新マルクス主義と新カント主義を無邪気に総合してウィーン派の支持をえた。」「それにしても、オーストロ・マルクス主義が真に達成した仕事は、一般哲学の分野のなかには存在しなかったと告白しなければならない。M. アドラーの知的手腕をどれほど高く評価したところで、その手腕は理論的前進を意味するものではない。他方……ルドルフ・ヒルファーディングの金融資本主義の研究は、ある新しいもの、重要なものをあらわしていた」(リヒトハイム, 『前掲書』, 257頁)。

成され、それは「ひっきょう経済学を否定するものにほかならない。」

というのは、心理学派の依拠する「使用価値」は、「経済学の考察範囲外に横たわるもの」であり、「自然科学の対象」でもあるからである。だが、この「使用価値から出発するところの価値論」に基づく「心理学派もまた経済現象を一つの統一的視点から把握しよう」とし、「経済事象の一理論に到達」した。その理論によれば、「ある物とある人との個人的関係」が基礎であり、そこで構成される価値は、財の「相対的稀少性」と「欲望」との関係から導出される財の「主観的な価値評価」である。だが、この「限界効用理論の価値概念には、實際上、このような(客観的な—筆者)量的規定性が欠如している」。また、客観的価値を構成する「労働」も「主観的に解釈」し、いわば「心理的な一事実」としての「骨折り」と「同じもの」だと措定する。さらに、「天然自然物」のうち「交換価値」をみい出したり、地代さえも「自然から生ずるもの」と理解する。このような心理学派の方法は、「使用価値をつくるかぎりでの労働の考察方法と価値をつくるかぎりでの労働の考察とを混同し」、「自然的規定と社会的規定とを混同」している。しかも「主観的・個人的な関係」を出発点とする心理学派は、そのために「それ自身のうちに変化の原理をふくまない」。

だから、かかる「考察方法は非歴史的であり、かつ非社会的である。その範疇は自然的かつ永久的範疇である」。その結果、「社会の運動法則と発展傾向とを発見することを放棄せざるをえない^(注24)」と。

次に、ヒルファーディングは、ベームにおけるマルクス批判の主眼、すなわち「マスキスの第三巻は、その第一巻を否認している。平均利潤率と生産価格との理論は、価値の理論とは調和しない」という見解に反駁する。この場合、ヒルファーディングは、ベームが『資本論』批判で抽出したマルクスの「根本命題」、「諸商品の交換価値——というのは、使用価値にではなくただ交換価値にだけマルクスの分析が向けられているのであるから——」^(注25)に対応して自己の視点を設定する。

もちろん、ヒルファーディングにとっても、商品は、使用価値と価値との「対立」および「統一」として規定されている。だが、彼は、根本的には、M. アドラーの方法において提起された「経済的価値」論と共通の想定に立ち、「考察方法が二重である」面を強調した。それゆえ、彼の論旨展開は、使用価値と価値とを区別して取り扱いかい、マルクス経済学の特色を「価値」観点に基づくこ

(注24) R. Hilferding „Böhm-Bawerks Marx- Kritik.“ Einleitung, I. III, a. a. O., 『邦訳』, 序文, I, III参照。バウアーもまた1909年、『Der Kampf』に掲げた論文「マルクスとダーウィーン」において心理学派に關説し次のように書いている。「もちろん、資本主義的商品生産においても心理学の法則は妥当する……。商品の価値評価は、心理学としては個人的評価行為、つまり個々の人間と一の効用対象物との関係にすぎないが、政治経済学によれば、人間相互の社会関係の最終成果として、生産力発展の一定段階における具体的な社会関係の一表現として把握される」(Otto Bauer, a. a. O. SS. 199~201)。このバウアーの設定は、ヒルファーディングの見解とほぼ同一の構成をとるにすぎない。

(注25) ベーム・バーヴェルク、『マルクス体系の終結』, 木本幸造訳, 60頁, 113頁。

とに依り、「社会関係」を方法論の基礎に据えたのである。このことは、「社会関係」を「交換関係」との関連で考察することを意味した。ヒルファーディングは、さしあたり、「マルクスの価値法則は、第三巻の諸結果によって廃棄されてしまうものではなくて、ただ一定の仕方に変化されたものにほかならない」と述べる。

彼によれば、ベームの指摘する価値と生産価格の矛盾は、実際には矛盾ではなく、「交換関係」における「歴史的的前提」の変化に照応した「価値法則の変形」(Modifikation des Wertgesetzes)なのだ。

ここで、マルクスにとって重要なことは、価値の総額=生産価格の総額、総剰余価値=総利潤であり、「理論の出発点」を「社会」におくことだとしたのである。そのうえで、ヒルファーディングは、「人間の社会関係の物的な一表現にほかならぬ商品の交換関係において、じっさいに現実化されるものは、生産当事者の平等性 (die Gleichheit der Produktionsagenten) である」という観点を導入する。

つまり、ヒルファーディングは、商品の「交換関係」と「社会関係」の関連を交換にたずさわる個々の「経済主体 (Wirtschaftssubjekt) の平等性」を包括して具体化する。

それは、「単純商品生産の機構」のもとでは「対等な・独立の・生産手段を所有している労働者」相互の関係であり、「資本制的交換過程」のもとでは「資本所有者」相互の関係である。^(注26)

そして、このような『ベーム・パヴェルクのマルクス批判』における方法は、そのまま『金融資本論』の中にも取りいれられてくる。

ヒルファーディングはいう。「ただ交換行為においてのみ……生産者たちの社会的関連もまた貫徹される」。この「交換行為は一の平等関係 (Gleichheitsbeziehung) である」とし「個別的交換行為」は、単純商品生産については「等しい労働に対する等しい労働」という条件のもとで、さらに資本制的生産については「等しい資本には等量の利潤」という条件のもとで成り立つとするのである。

だから、前者の条件において「価値」で交換される「理論的考察の出発点」が、後者の条件においては「生産価格でもって売られる」というように「変形」するにすぎない。^(注27)

確かに、ここでは、「ヒルファーディングは、競争価格が『实在』価値 (true value) から乖離する資本論第三巻の観点を明らかに採用している」としても、それは、ベーム批判の延長であり、ヒルファーディング的な価値と生産価格の矛盾の解決の仕方の一結論にほかならない。^(注28)

いずれにせよ、彼は、「交換価値」という観点到に制約され、二つの相異った生産様式における基

(注26) R. Hilferding „Böhm-Bawerks Marx-Kritik“ a. a. O., II, 『邦訳』, II 参照。

(注27) R. Hilferding, F. K., SS. 15~16, 『邦訳』, 22頁~23頁。

(注28) Howard. S. Ellis, German Monetary Theory, 1905—1933, p. 103, 1934.

本的な社会関係について「交換行為」を遂行する「経済主体」の関係という共通の形式でくくったのである。

このことは、M. アドラーのカントによるマルクス解釈の範囲を出るものではなく、ただ、ヒルファーディングの前進は第一巻に制約されていたM. アドラーの方法を第三巻にまで拡張したことにあるとってよい。

したがって、以上のようなヒルファーディングの方法論の特質は、結局、次のようになるだろう。

第一に、彼は心理学派の「使用価値」観点に対し、マルクス経済学の「価値」観点を力説し、後者の立場から前者の経済学には、「生産の社会的契機 (gesellschaftliche Moment)^(注29)」が捨象されていることを中心にして批判したのである。第二に、彼は、バームのいうマルクスの矛盾を価値法則の変形に還元したとき、「歴史的的前提」の変化によって創造されたプロレタリアートは「生産価格 = K + P」のうちの「Kの成分 (Bestandteil) としてあらわれ」、「剰余価値をつくるというそれだけの意味しかもたない」と措定したのである。

ヒルファーディングの「社会関係」では、プロレタリアートは「交換関係」内部に編成され、いわば「法律的平等性」という観念の平等性を有する従属的なものとして位置づけられるにすぎない。^(注30)

だが、このような問題を含んでいたにもかかわらず、確かに、ヒルファーディングの批判方法は、一方では、心理学派の方法論的特徴、その理論の階級的な性格、範疇の混乱、あるいはその認識の限界を暴露しえたかぎりにおいて、また他方では、『資本論』の全巻をそれなりに統一的に説明し、マルクスの「労働価値論」を擁護しえたかぎりにおいて、有効であったといえよう。だが、マルクス主義経済学の観点に立つ限界効用論批判は、ヒルファーディングの批判があらわれる十数年前、すでにシュミットによって行なわれており、その業績は、エンゲルスによって高く評価されていた。^(注31)シュミットは、そもそも限界効用論に基づく主観的交換価値が商品生産社会には存在しないと設定し、その意味では、かかる心理学派の方法は、「交換価値現象」つまり価格形成にはまったく役立たないと否定した。だが、あえて、心理学派の「偉大な発見」の意義を考察すれば、それは消費者が流通過程でつねに常なむ行為に対して、浅薄な心理的分析を行ったことだと指摘したのである。^(注32)このような先駆的研究はあったものの、周知のように、ヒルファーディングの方法を継承・深

(注29) F. Eulenburg, a. a. O. S. 566. だが、オイレンブルグは、ヒルファーディングによる『資本論』第一巻と第三巻の矛盾解決の試みは、「すべての弁証法的な精巧さにもかかわらず、私には、やはり、成功していないようにみえる」と述べている (Ebenda)。

(注30) Hilferding „Böhm-Bawerks Marx-Kritik“ a. a. O. S. 36, 『邦訳』, 212頁。

(注31) Marx-Engels Werke, Bd. 38, S. 458.

マルクス・エンゲルス『資本論に関する手紙』(下巻), 岡崎次郎訳 406頁~407頁。

(注32) C. Schmidt, „Die psychologische Richtung in der neueren Nationalökonomie“, Die Neue Zeit, X Jahrgang, Bd. I, Nr. 41, 1891~1892, SS. 459, 463~464.

化させ、体系的にオーストリア学派の批判を行ったのがブハーリン (N. Bucharin) である。彼は、彼特有の社会学的観点に立って同学派の性格を「ブルジョア金利生活者」の経済学と規定し、特に「消費の観点」の要素を強調した。ところが、ブハーリンは、オーストロ・マルクス主義の理論的性格を吟味することなく、ヒルファーディングらの展開したような心理学派批判の「説明の範囲に止どまってはならない」と措定し、ベーム批判の方向を新たな側面から再検討して、ベームのもつ論理的矛盾をついたのである。^(注33)

このようにみてくると、ヒルファーディングの経済学の基本的性格は「交換関係」を媒介として成立する「社会関係」を重視することに特色がある。したがって、当然のことながら、かかる傾向は、「交換過程」に偏重し、「使用価値」をも捨象するがゆえに、「価値形態論」を無視していかざるをえなくなる。この点は、後段で論じる如く、ヒルファーディングの「独創的な貨幣論」を生み出す論拠ともなり、また従来、しばしば、彼の理論の「流通主義的偏向」や「観念的歪曲化」を指摘される原因ともなっていた。^(注34)

もちろん、こういう批判は、ヒルファーディング理論を商品の交換それ自体にひきよせて解釈したり、「論理」の問題として理解したりしたかぎり——ヒルファーディングの設定もそのように読みとれる如くに構成されているのであるが——、一面的には正当であろう。だが、他面では、この批判は、彼の方法論の根柢に存在するM. アドラー的発想とベームのマルクス批判の枠組に限定された彼の立論とを無視するものであり、その限りでは、オーストロ・マルクス主義が積極的に提起した問題を内在的に検討するものではない。

(3) 因果性と目的論

すでに論じたように、M. アドラーもヒルファーディングもマルクス経済学においては、「社会的存在」、いいかえれば「歴史的・社会的な生活」をその対象として措定していた。

しかし、マルクス自身の経済学の方法によれば、その目標は「経済的な社会構造の発展を一の自然史的過程」と認識し、「資本制生産の諸々の自然法則」を採求することであつた。^(注35) それゆえ、

(注33) ブハーリン、『金利生活者の経済学』、小林良正訳、29頁～46頁、96頁～104頁、108頁～110頁。ブハーリンは、ベーム・バヴェルク批判の新たな側面として、社会学的批判を展開するとともに、他方ではベーム理論の「全体系を、その内的関係に於いて把握し、然る後始めて、その根本的誤謬の所産たるその矛盾と不完全さを摘発しなければならぬ」と提起した。彼は、この体系構成の方法および論理性を吟味するという観点をベームの「価値論と価格問題」に適用し、その結果、まさにこの点においてベームは論理的誤謬である「循環論法」に陥り、「内的矛盾なしに」その理論を展開しえぬことを示したのである。

(注34) このようなヒルファーディングの方法に対するマルクス経済学からの批判は、ここであげた二つの方面より行なわれている。たとえば(i)「流通主義的偏向」については、デ・イ・ローゼンベルクの『資本論注解1』(副島種典・宇高基輔訳、213頁)また(ii)「観念的歪曲化」については、ゲー・カズロフ編輯『前掲書』、79頁を参照。

(注35) K. Marx, Das Kapital Bd. I, Dietz SS. 12, 16, 1969, 『資本論』第1巻(上)、長谷部文雄訳71頁、73頁。

彼らもまた、マルクスのいう「自然」の意義をどのように精神諸科学の一分科である経済学の中に包摂するのかという問題に当面せざるをえない。

この点について、これまで若干触れておいたが、M. アドラーは、さらに具体的に次のように指摘する。「まさに、国民経済学が精神科学の自然科学的性質の力強い促進者となったのは、それが初めて社会事象の混乱した領域においてなお現実的法則の方法的可能性を示したからである」と。

つまり、彼は、「自然」を社会事象における経済法則に還元したのであるが、そのうえでなお、この法則に「適当な形式」(die adäquate Form)を与えたことが「カール・マルクスの史的唯物論の業績であった」と規定する。^(注36)ところで、M. アドラーによれば、自然法則の「適当な形式」とは、因果法則のことであった。したがって、かかる見解に基づけば、「歴史的・社会的生活」の考察は、「社会的因果要素をその根本的な一社会原理に統一する唯物史観によって導かれる」ことに^(注37)なる。その意味では、彼は「人類社会の歴史を自然現象の進化と同一視して、自然科学的没価値的普遍化を行い、自然法則的な因果律を定立せん」と試みたのであった。^(注38)

しかるに、「歴史的・社会的生活」を営む人間は、広義の自然に属するとはいえ、意志をもたない物理的・化学的な自然ではなく、それは「精神的自然」(die geistige Natur)として、すなわち「思惟・意欲および行動として概念的に把握されるべき」「存在」である。

だから、M. アドラーは、「社会生活の意志的領域を自然認識の因果的合法則性と無意志的世界の事象とに接合すること」というようにマルクスの方法を理解したのであった。

そうだとすれば、因果法則は、ただ経験的な社会事象の因果系列のみを説明するだけのものではなく、当然、その中に「社会的必然をその意志活動から初めて提起し、またこれを完成していくところの創造的意識」をもった人間存在を前提としなければならぬ。^(注39)

このことは、M. アドラーの「因果的考察」が客観性と主観性とを連関させ、それと同時に、場所的契機のみならず、歴史的必然という時間的契機をも含めていたことを意味する。すなわち、「因果的考察」は、「過去にあてはまるのみではなく、あらかじめ未来の発展に対しても同様に妥当する」こととなる。^(注40)

というのは、「因果法則的必然性」においては、「未来の社会事象は、その全過程がすでにあらかじめ確定的な自然過程として決定されているとはいえ、人間の歴史的現実において、かれの現象の個々の部分では、まず一個の意欲 (ein erst zu Wollendes) として把握されねばならぬ」からである。

(注36) M. Adler, „K. T.“, a. a. O. S. 229, 『邦訳』58頁～59頁。

(注37) M. Adler, Kant und Marxismus, S. 12, 『邦訳』7頁。

(注38) 平野義太郎, 「マックス・アドラー『唯物史観におけるテレオロジー』」『社会科学』創刊号, 51頁。

(注39) M. Adler, Marx als Denker, SS. 74～75, 『邦訳』122頁～123頁。

(注40) M. Adler, Kant und Marxismus, S. 91, 『邦訳』53頁。

(注41) M. Adler, Marx als Denker, SS. 74～75, 『邦訳』123頁。

したがって、思惟し意欲する主体的な活動としての人間は、「このような未来そのものの面前に
いる直接的意識としては、未来を課題としなければならない」。それゆえ「科学的に観察すれば、
因果的に決定される過程たることを示す事象も同時に直接的意識に対しては、実現されるべき目的
体系 (ein System zu verwirklichender Ziele) としてあらわれてくる」こととなる。^(注41)つまり、「歴
史の因果的活動 (das kausale Getriebe) は、直接、目的論 (Teleologie) に転化していく」とM. ア
ドラーは述べる。^(注42)

要するに、彼にとっては、「目的論は因果性の一のまったく特殊な様式であり、一の原因・結果
の関係である」のだ。^(注43)

いうまでもなく、かかるM. アドラーの因果性論と目的論との関係は、きわめて抽象的な表現を
用いているとはいえ、「歴史的必然性」としての社会主義社会を想定していることにその方法の核
心がある。だが、彼は、この未来の必然性に対しては、精神諸科学における普遍妥当性という理論
的世界の問題に限定し、その「発展の必然性」に関しては、あくまでも「純粹に思惟する態度をと
る」のである。^(注44)

すでに論じたように、ヒルファーディングもまたM. アドラーと同様に、マルクスの経済学的考
察を「因果的に支配される過程」として理解したのであるが、この理論的前提からすれば、その帰
結もまた、M. アドラーの規定と一致したとしても何ら偶然ではない。

ヒルファーディングはいう。「マルクス主義の正当性の洞察」は「社会主義の必然性の洞察を
含む」とはいうものの、それは決して「実践的行動の指示」でもなく、「すべての科学と同様に、そ
の成果の客観的普遍妥当性を頑固にあくまでも要請する」ものであると。^(注45)

では、このような傾向を生みだしたM. アドラーにあっては、一体、社会主義とは如何に規定さ
れているのだろうか。M. アドラーによれば、それは「意識的な統制と嚮導 (Lenkung)」とに基づ
く人間の意識的連帯的な生活共同体 (eine bewußtsolidarische Lebensgemeinschaft) であり、「社会
生活の経済的發展自体の結果」として、「目標を理想として立てる」「理念」のうちにあらわれてくる。^(注46)^(注47)

それゆえ、ここでは、資本制的社会の自然法則としての因果性は、「未来の社会事象」として出
現する社会主義社会と内的に直結し、理論的には、自然過程として把握されているのである。だ
が、この過程は、他面では、資本制的社会において抑圧され搾取されているプロレタリアートにと

(注42) M. Adler, Marx als Denker, S. 64, 『邦訳』105頁。

(注43) P. Heintel, a. a. O. S. 16.

(注44) M. Adler, Kant und Marxismus, SS. 94, 111, 『邦訳』55頁, 64頁。

とはいえ、M. アドラーは、具体的な政治活動を軽視するのではない。彼によれば、それは「子孫に
とって極めて喜ばしきこの時点をより速かにまねくことができる」ようにすることである (M. Adler,
Ebenda, S. 111, 『邦訳』64頁)

(注45) R. Hilferding, F. K. SS. 4~5, 『邦訳』13頁~14頁。

(注46) M. Adler, Marx als Denker, SS. 65~66 『邦訳』107頁, 109頁。

(注47) M. Adler, Kant und Marxismus, S. 111, 『邦訳』, 64頁。

っては、未来社会を志向すべき達成可能な目的と認識され、「理想」として設定される。M. アドラーは、客観的な普遍的法則とプロレタリアートの主体的当為とを統合して、因果性と目的論との関係を提起したが、この方法には、社会体制の移行を媒介する契機がまったく捨象されているのである。だから、かかる発想から出てくる結論は、「社会変革は、理論では因果的必然性となっても、歴史的現実では依然人間が要求として意識するようになるところのものである」というものにすぎない。^(注48)しかし、ここで、M. アドラーが目的論を「意識的統制と嚮導」とに結びつけ、資本制的生産様式と内的連関をもつものと理論的に把えたことは、そのまま、ヒルファーディングにもあらわれてくる。

彼は、まず未来社会の理論規定を「労働および労働に対する支配力が意識的に社会的物質代謝と社会的権力地位の統制原理にまで高められて」^(注49)いる状態と理解し、社会主義の基準をほぼ M. アドラーと同様な内容に求める。その意味では、「生産の社会的統制」を確立した金融資本の中に、このような意識的な統制原理を発見し——まだ、依然として「敵対的形態」をもっているが——、社会主義社会の前提として評価したとしても、あるいは「プロレタリア的政策の目標」に「資本主義の克服による競争の完全な廃止」^(注50)を要求したとしても、何ら不思議ではない。というのは、歴史的現実には因果的必然性によって目的に接近するからであり、また、この目的はプロレタリアートの実践的要求としてもかかげられるべきものだからである。

かくして、ヒルファーディングは、『金融資本論』の随所で『資本制的生産様式における無政府性』^(注51)を「しだいに克服しようとする傾向が金融資本にあると信じ」、萌芽的とはいえ、統制原理の作用する状態を実証的に容認し、さらにこの原理を部分的に、あるいは全面的に実現する生産様式を理論モデルとして構想する。確かに、因果法則を貫ぬく社会的必然は、歴史的現実の中で未来社会の可能的条件を形成するだろう。

だが、ヒルファーディングは、この条件を傾向として評価するだけでなく、意識的な統制原理と結びつけ、社会変革の戦略として具体化したのである。ここでは、「一切のものは組織される」^(注52)という点に集約され、国家および経済制度の組織化・統制化が基本目標としてかかげられる。

つまり、変革のプロセスは、プロレタリアートを組織した労働組合が、その政治的代表たる労働者党によって国家を征服し、この権力を行使して「金融資本を占取さえすれば」よいというものであった。^(注53)

したがって、後程、彼が「生産の社会的統制」における「敵対的形態」を過少評価して、「組織

(注48) M. Adler, Marx als Denker, S. 77『邦訳』127頁。

(注49) R. Hilferding, „Böhm-Bawerks Marx-Kritik“ a. a. O. S. 12, 『邦訳』164頁。

(注50) R. Hilferding, F. K. SS. 556~557, 『金融資本論』(下), 岡崎次郎訳, 177頁~178頁。

(注51) F. Oelßner, „Vorwort zur Neuausgabe“ F. K. S. XXXII, 『金融資本論』(Ⅰ), 林要訳, 44頁。

(注52) ラーヤ・ドウナエフスカヤ, 『疎外と革命』三浦正夫・対馬忠行訳, 222頁。

(注53) R. Hilferding, F. K. S. 557, 『邦訳』178頁。

された資本主義は、だから、実際には、自由競争の資本主義的原則を計画的生産の社会主義的原則におきかえることを意味する^(注54)。かかる計画的な指導された経済は、可能なかぎり高度に、社会の意識的な作用を、すなわち……国家による作用を基礎としている」と定義して、国家の役割を強調したとしても、彼の根本思想に変化が生じたわけではない。

このように金融資本の生産力と組織性に眩惑されたヒルファーディングが、資本主義の枠内で無政府的生産の廃止を如何に空想しようとも、プロレタリアートによる強制的な「旧生産関係の廃止」^(注55)を目標としたマルクスとは著しく隔っていることは明らかである。

(1978年3月6日稿)

(注54) Sozialdemokratischer Parteitag, 1927, in Kiel, Protokoll, mid dem Bericht der Frauenkonferenz (リプリント版), 1974, S. 168.

(注55) マルクス『共産党宣言』, マルクス・レーニン主義研究所訳, 56頁。